

2021年8月15日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

ヨブ記 35 : 7、ルカによる福音書 17 : 1～10
「取りに足りない僕です」

<イエスさまの弟子の生き方>

今日の御言葉は、イエスさまがご自分の弟子たちに向かって語られた御言葉です。イエスさまに従っている者たち、つまり、わたしたち信仰者の歩みについて、イエスさまが教えて下さったことです。今日の御言葉の一番最後には、こうありました。

「あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』と言いなさい。」

イエスさまに従う者は、自分が「取るに足りない僕」であることを自覚し、たとえ命じられたことをみな果たしても、それは僕として当然のことをしただけなのだ、ということを弁えて、主人であるイエスさまに従っていきなさい、と言われたのです。

まず、わたしたちが「取るに足りない僕」であるというのは、どういうことでしょうか。この「取るに足りない僕」というのは、「ふつつかな僕」とか、「無益な僕」と訳されたりしますが、意味としては「価値がない、資格がない」と言っても良いでしょう。

何の資格がないかという、それはイエスさまが7節以下のたとえで話されたように、僕が主人の命令を果たすこと、主人に従って仕事をするのは当たり前なこと、そのことを主人はいちいち感謝したりしない。だから僕は、自分がしたことについて、主人に感謝してもらいたいとか、報酬や見返りが欲しいとか、そんなことを言う資格はないということです。

「僕」というのは、「奴隷」のことであって、「雇人」ではありません。

雇人は、主人と契約をして、働いた分の見返りである報酬をもらいます。

しかし、奴隷は主人に買い取られたものであり、主人の所有物なのです。その奴隷が、自分の主人の命令に従うこと、主人のために働くことは、至極当たり前のことであって、主人から何か報いを得るためにしているのではないし、感謝されるべきことでもないのです。

僕は、当然やるべきことをするだけなのだ。主人に命じられたことを果たすのは当然のことなのだ。だから、あなたがたが何かをしたからと言って、それは自分で誇るべきようなことでもないし、それに対する報いを受けたいと望むようなことでもない。神さまに仕えるとは、イエスさまに従っていくとは、そのような僕として歩いていくことなのだ。

イエスさまは、弟子たちに、わたしたちに、そう教えられたのです。

<僕がなすべきこと>

では、僕が主人に命じられていること。つまり、わたしたちがイエスさまに命じられ、「そ

れを果たしたのは当たり前のことです」と言いなさい、とされていることとは何なのでしょうか。それが、1～4節に語られていることなのです。

〔つまずかせない〕

まず、1～2節を見て見ましょう。こうあります。「つまずきは避けられない。だが、それをもたらす者は不幸である。そのような者は、これらの小さい者の一人をつまずかせるよりも、首にひき臼を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましである。」

まず、僕がなすべきことの一つ目は、小さい者をつまずかせない、ということです。

「つまずき」というのは、教会の中でよく使われる言葉ですが、信仰の歩みの妨げとなる障害物のことです。神さまから離れてしまうような罪への誘いや、神さまに喜んで従うことが出来なくなってしまふこと。そういったことを「つまずき」と言います。

まずイエスさまは、「つまずきは避けられない」と言われました。わたしたちが、自分の信仰の歩みの中で、つまずいてしまうことは避けられない。様々な誘惑やつまずきに遭うことがある。それは、はっきりと仰います。

しかし、自分がつまづくことはあっても、他の人をつまずかせる者はいけない。弟子の仲間同士で、兄弟姉妹の中で、特に「小さい者の一人」、つまり、軽んじられているような者や、弱々しい歩みをしている者の信仰を、つまずかせてはいけない、と言われたのです。

〔戒めること、赦すこと〕

それから、3～4節です。「あなたがたも気をつけなさい。もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

次に、イエスさまに従う僕がなすべきことは、兄弟が罪を犯したら戒めること。つまり、悔い改めることを教えなさい、ということです。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい、と言われました。

罪とは、根本的には、神さまに背くこと、神さまの御心に逆らうことです。神さま中心ではなく、自分中心に生きることです。

そしてその罪は、具体的な生活の中で、兄弟を傷つけることや軽んじること、不誠実になることなど、隣人に対する具体的な罪として現れてきます。

イエスさまは、主にある兄弟同士の中で、そのように罪を犯すようなことがあった場合には、まずその兄弟を戒めなさい、と言われます。その人が犯した罪を、見て見ぬふりをしたり、無かったことにしてはいけないのです。ちゃんと、共に神さまの御前に立って、兄弟に対して罪を犯したことを悔い改めるように、教えなければならないのです。

「戒める」とは、ただ断罪すること、裁くこと、非難することではありません。戒めることの目的は、罪を犯した兄弟が悔い改めて、再び主にある良い交わりの中で、共に生きようになることなのです。だから、その兄弟が悔い改めたなら、その兄弟を「赦してやりなさい」

い」ということが求められているのです。

しかもイエスさまは、赦すことについては、「一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい」と言われました。

一日七回あなたに罪を犯す。もういい加減にしろ、という回数です。そして、その度に七回「悔い改めます」と言って帰ってくる。そんなに繰り返されては、「その悔い改めは、今回は本当なのか？」と聞きたくなるかも知れません。誠実さを疑いたくなります。でも、あなたは赦しなさい、と言われるのです。

これはもう、無条件に赦しなさい、と言われていることと同じです。イエスさまは、わたしたちが兄弟を赦すこと、赦しに生きることを求めておられます。これは、赦す方に忍耐がいること、我慢がいることです。傷つきながら赦すようなことです。それでも、イエスさまはそうしなさいと言われる。

それは、自分の心に痛みや苦しみを負うのだとしても、その兄弟の罪からの救いこそを、あなたは心から願う者となりなさい、ということなのです。

<信仰を増してください>

このように、小さい者をつまずかせないこと。罪を犯した兄弟を戒め、悔い改めたなら赦すこと。無条件に、赦すこと。これが、イエスさまに従う者が、しなければならないこと。「命じられたことを果たしただけです」と言って、なすべきことだと言うのです。

わたしたちは、う〜んと唸ってしまいたくなります。何と難しいことでしょうか。とてもできる気がしない。そんなことは無理だ。そう思うのではないのでしょうか。

これを聞いたイエスさまの弟子たちも、そう思ったに違いありません。だから5節にあるように、イエスさまに「わたしどもの信仰を増してください」と願ったのです。

「今の自分の信仰を顧みれば、とてもではないけれど出来ません。それが出来るように、わたしの持っている信仰の力を、もっと増やし、もっと強くして下さい！」

これは、わたしたちも日々の中で、自分の歩みが頼りなく思う時、自分の弱さや、小ささを思い知る時に、よく神さまに求めていることかも知れません。

しかし、イエスさまはこう答えられたのです。

「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」

からし種一粒ほどの信仰。「からし種」とは、目に見えないような、小さな小さなもののたとえです。そんな小さな信仰でも、「ある」ならば、桑の木に「抜け出して海に根を下ろせ」と言ったら、言うことを聞くのだ、と言われました。

つまり「信仰」は、小さいとか大きいとか、少ないとか多いとかではなくて、あるか、ないかの問題だ、ということです。「ある」ならば、そのような奇跡は、起こるのです。

イエスさまは、桑の木に命じたら、それが地面を抜け出して、動いて海に入って行って、根を下ろす。こんな、現実ではまったくあり得ないような奇跡を、例に出されました。

つまりイエスさまは、わたしたちが小さい者をつまづかせずに歩むこと。兄弟を戒めること。戒められて、罪を悔い改めること。兄弟を赦すこと。それが出来るというのは、わたしたちにとって、それほどの奇跡が起こると同じことだ、と言っておられるのです。普通ではあり得ないこと。わたしたちには、まったく出来ないこと。イエスさまは、それをよくご存じなのです。

しかし、信仰があるならば、あなたたちには、それが出来る。不可能なことが可能になる。そうイエスさまは言って下さるのです。

その「信仰」は、わたしたちが自分の中に見出して、自分の力で大きく育てたり、強くしたり、増やしたりするようなものではありません。信仰は、神さまが与えて下さるものであり、神さまが働いて下さる力に依り頼むことなのです。

わたしたちは、神さまが成し遂げて下さる御業を信じて、それに頼ることしか出来ません。でも、神さまにこそ依り頼むならば、神さまから与えられる信仰に生きるならば、その奇跡は起こるのです。罪人であるわたしたちが、罪を赦された者として生きることが出来る。兄弟の罪を戒め、赦す者となることが出来る。兄弟の罪からの救いを真剣に求める者となることが出来る。取るに足りない僕が、神さまのご命令に、主の御言葉に、従うことが出来る者となるのです。

神さまの力が、イエスさまの救いの力が、わたしたちに、そのように生きる道を与えて下さいます。この、神さまが与えて下さる信仰に生きる。神さまの御業による奇跡に生きる。神さまが与えて下さる力で、イエスさまに従って生きる。それが、イエスさまの僕としての生き方、イエスさまを信じる者の生き方なのです。

<幸いな僕>

このように、僕であるわたしたちが、主人である神さまからすべてを与えられ、神さまに導かれ、神さまにそのように生かされているのなら。神さまのご命令を果たしたからと言って、自分の力を誇ることも、見返りを求めることも、これだけ頑張ったので褒めて下さい、と言うこともないのです。「しなければならぬことをしただけです」と言うのです。

いや、もしかしたら、「しなければならぬことをしただけです」ということさえ、おこがましいのかも知れません。わたしたちは、しなければならぬことも出来ないのに、それを神さまの力によって成し遂げさせて下さるのですから。だからわたしたちは、ただ神さまに忠実に、喜んで、感謝して、仕えていくばかりなのです。

わたしたちは、イエスさまに買い取られ、イエスさまに所有されている僕です。しかも、どのように買い取られたかという、神の御子イエスさま御自身の貴い血が代価として支払

われ、買い取られた僕なのです。取るに足りない僕を、わたしたちを、それほどの価値がある者として、買い取って下さった。そんなわたしたちが、主人であるイエスさまの忠実な僕としてご命令を果たすのは、御言葉に従って歩むのは、まことに当然のことなのです。

しかも、わたしたちの主人は、僕を心から愛し、憐れんで下さる主人です。

9節でイエスさまは、僕が主人の命令に従ったとしても、「主人は僕に感謝するだろうか」と言われました。僕が見返りなく主人の命令に従うのは当たり前だ。「しなければならないことをしただけです」と言いなさい、と言われました。それが、主人と奴隷の当たり前の関係なのだと教えられました。

しかし、ルカによる福音書の12:37では、イエスさまが目を覚ましていなさい、ということ語られた時に、「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。」と言われました。

イエスさまは、わたしたちがイエスさまの恵みの内に歩み続けるならば、終わりの日には、主人であるイエスさまが、僕のわたしたちを食事の席に着かせて下さり、わたしたちのそばに来て、給仕して下さいというのです。

イエスさまは、この世ではあり得ないような主人です。イエスさまは、僕を愛し、もてなし、喜びを与えて下さる。僕のために命まで捨てて下さる。そんな憐れみ深い主人です。

わたしたちはこの主人から、すべての力と恵みをいただいて、奇跡のような信仰の歩みを歩ませていただくことが出来るのです。神さまの御言葉に従い、兄弟姉妹との良い交わりを築き、神さまの喜びにあずかりつつ、生きていくことが出来るのです。

取るに足りない僕は、これ以上ない素晴らしい主人を持つ、まことに幸いな僕なのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

イエスさまの僕とされたこと、イエスさまを主人として歩む者とされたことを、心から感謝いたします。

しかしわたしたちは、あなたの御心に従うことが困難で、ご命令を果たす力もないような僕です。どうかお赦してください。あなたが与えて下さる信仰によって、イエスさまの救いの恵みによって、聖霊なる神さまがわたしたちを新しく造り変えて下さることによって、わたしたちをあなたの御心に叶う僕として下さい。

あなたの恵みに生き、あなたの喜びに与る僕として下さい。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン